

# やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

|         |                    |
|---------|--------------------|
| 誌名      | やぶなべ               |
| 号/発行年/頁 | 3 / 1957 / 61      |
| タイトル    | 青森県理科教育研究会発表会に参加して |
| 著者名     | 佐々木完治              |

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

# ◆ 青森県理科教育研究発表会に参加して ◆

～ 佐々木 完 治 ～

我々生物部員の活動を發揮する大きな機会としてこの発表会がある。

9月又又日我々は、次のものを発表した。

- 一、 先輩室谷君のゴマシジミの生態オ二報
- 一、 榎芹君の青森市内のゼフィルス分布と環境・植物との関係
- 一、 青森市のゼフィルスの日周活動オ二報 (筆者発表)

等である。動物や植物に関する発表が出来なかったのは残念であるが、これらのものは、以前に東北大会に発表して諸先生的好评をばくした。それにもまして、今回の発表はその批評により修正し、発表練習も十分につんだので我々としては、十分期待できるものであつた。

発表会場は二つに分かれ、しかも一会場に審査員ホ一人きりであつたのは、審査の際に公平にゆかないだろうといささか不満であつたが、発表後の審査員の講評は次の様であつた。

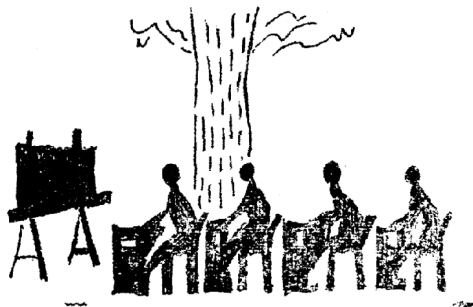
「高校の研究は、観察的なものより、実験的なものが主体となつているから、今回の発表も実験的なものの方が有利である。-----」そしてその結果は、我々の予想をうらぎって以外であつた。すべて実験的な研究ホ入送したのである。送外は我々の研究に足りない点があつたからだと思つた。後の反省会では次のようが意見ホ出た。

「実験的なものは、比較的高度な技術を要し、それから得られた結果も応用面が広いからだと思つたが、しかし、かならずしもそうとは限らないと思つた。場合によってはかならず観察を主にしなければならぬときもある。これは本校のみ言われる問題ではない。他校にかつても、我々から見ればきつめて立派なものがあつたと思つた。

この様に一方的に実験的なものはかり取りあげるのは考ふるべきである。あの機会に私前聖愛高校の実験や野田比高校の研究はさすがに立派であり、大いに学ぶべきところがあつたと思つた。

それでは、来年こそは、ど今回の発表のおかけで一同の意気はふるいたつた次だである。

(筆者は 一年)



## 正 誤 表

原本に「正誤表」が付属している場合、該当部分を以下に転記しています。「行」は、原則としてタイトル行なども含む上からの行数です。（「u」が付く場合は下からの行数です。）

| 頁  | 行  | 誤       | 正        |
|----|----|---------|----------|
| 61 | u7 | かならず観察を | かならず実観察を |